

地蔵岳の山頂近くにオオシラビソの種子をまきました

令和6年6月15日(土)に、蔵王山を構成する連峰のひとつ、地蔵岳山頂近くのオオシラビソを再生させるため、圃場(苗畑)を造成して、種子を播種(はしゅ=まきつけ)する作業が行われました。

蔵王連峰の特徴的な植生であるオオシラビソ(別名アオモリトドマツ)林は平成25年に蛾の幼虫による大規模な食害を受け、数年後に集団で枯死しました。このオオシラビソ林の再生の道筋を探るための、幾つかの取組のひとつが種子を採取して播種し、苗木になるまで育成することです。

樹氷復活県民会議では標高1400m付近で播種を行っていますが、今回は標高1670m付近の気象条件等がより厳しい地点でオオシラビソの播種を試みました。

この日は山形西ロータリークラブ(RC)から37名、山形県立村山産業高校から11名が参加し、多大なご協力を得ました。RCの皆様が昨年度刈払機でササを刈払い造成した圃場を更に整備のうえ、オオシラビソの種子3,400粒を20個の区画に播種しました。そして小動物に種子を食べられないよう樹脂+アルミニウム製の枠で囲み、上部を金網で覆い木ねじ等で固定しました。

整備の際は、根切りチェンソー(ササの根を切る)、ハンドオーガー(枠を地面に据えるため土を掘る)、ドリル、電動ドライバー等の機械を駆使し、作業を行った結果、予想以上にはかどり正午前には作業が完了しました。また樹高20~30cm前後のオオシラビソ自生稚樹の移植も実施しました。

播種後、ササの生い茂る被害箇所への植付が可能になる20cmに成長するまで、最低でも6~8年かかる等、たいへん息の長い取組です。当署としましても引き続き様々な方々のご協力を仰ぎながら、樹氷を形作るオオシラビソ林の再生に取り組んでまいります。

